

ガイドの有無によるまち歩き体験と地域の生活への眼差しの差異

Differences in the Quality of Experience and the Viewing Direction for Local Community Lives between Guided and Non-Guided Walkers in the Town Area

地本 真菜*・山本 清龍**・木下 勇*

Mana CHIMOTO and Kiyotatsu YAMAMOTO and Isami KINOSHITA

要旨：本研究では、岩手県盛岡市を事例として取り上げ、①まち歩きをガイド型と非ガイド型に区分して両者を比較し、まち歩きに関する意識と体験の差異を把握すること、②まち歩きの際の地域の生活への眼差しに着目し、観光体験に生活の視点を取り込む方策を考察すること、の2点を目的とした。その結果、ガイド型では効率性を、非ガイド型では時間消費性を求めており志向が異なっていた。しかし、両型に共通して、町家エリアの歩行者で生活空間を歩きたいという期待が高く、こうした志向を観光に取り込む上では、まちの静穏性や複雑性を考慮することが有効と考えられた。

キーワード：ガイド、眼差し、効率、時間消費、盛岡、アンケート調査

Abstract : This study treats Morioka city as a case study area and aims 1)to grasp the differences in the awareness and the quality of experience between guided and non-guided walkers in the town area, and 2)to consider the way how to introduce tourists' viewing direction for local community lives while walking into tourism experience. As a result, the intention of walkers differed such that efficiency was expected by guided walkers and time consumption by non-guided. However, walking in living space was expected by both walkers in the traditional townhouse area. It is thought to be useful to take the tranquility and the complexity of town into account when the viewing direction for local community lives is introduced into tourism.

Key Words: guide, viewing direction, efficiency, time consumption, Morioka, questionnaire

はじめに

近年、観光事業者が主体となる発地型観光だけでなく、地域が主導して旅行者を受け入れる着地型観光が目立っており、観光まちづくり、まち歩きへの関心が高まっている。そのような中、生活感が感じられる観光地の構築の重要性が指摘されている(西村, 2003)。また、まち歩きを、地域住民の暮らしとまちに反映される地域の歴史の直接体験と論じるもの(茶谷, 2012)もあり、生活にむけられる来訪者の眼差しを、地域がどのように受け止め、観光地づくりに取り込めるかは一つの論点である。訪問地における生活とのふれあい、体験に関する知見は少なくなく、今井ほか(2003)は、生活空間の歩行が交流やふれあいを促進し、経済効果や地域理解を高めることを明らかにした。また、直井ほか(2013)は、歴史的町並みにおいて住民の生活が観光資源となることを実証した。しかし、歴史性の異なる地区が複合する都市の中で、生活空間を観光資源として位置づけることが可能かを検討した事例はみあたらない。一方、地域の魅力と個性を紹

介する市民ガイドの重要性も高まっている(茶谷, 2012)。とくに、観光ボランティアガイドに着目すると、その活動は、1980年代中頃まで私設のガイド協会が中心だった(加藤ほか, 2003)が、1980年代後半から行政が積極的に関与し、1990年代中頃から団体数が急増した(フク、2008)。2015年度現在、観光ボランティアガイドの団体数は1,688、ガイド数は43,966人である¹⁾。既往の知見では、来訪者の受入体制づくり、観光まちづくりの視点を持つ研究成果がいくつかあり、まず、ガイドの活動状況と知識習得形態から地域的展開を分析したもの(磯野, 2016)、生き甲斐や誇りの醸成、地域活動への積極的参加などガイド本人への効果を論考したもの(松並ほか, 2013; 林ほか, 2012)がある。また、地域の魅力に触れた住民が観光の担い手となり新たな観光客の掘り起こしへとつながった事例(深見, 2009)もある。さらに、空間利用の観点から、ガイドや訪問の経験による観光ルートの差異(今井ほか, 2004)、観光スポットのイメージと回遊行動との関連性(西井ほか, 2000)、回遊空間における経路選択と空間認知(徐ほか, 2001)、都市の歩行者の回遊行動(木下ほか, 1999)を明らかにした研究成果が

*千葉大学大学院園芸学専攻

**東京大学大学院農学生命科学研究科(前岩手大学農学部)

表1 回答者の基本属性と旅行特性

		ガイド型		非ガイド型				ガイド型		非ガイド型				ガイド型		非ガイド型			
属性	カテゴリー	人	割合	人	割合	属性	カテゴリー	人	割合	人	割合	属性	カテゴリー	人	割合	人	割合		
性別	男	58	50%	156	48%	夫婦	夫婦	24	21%	113	35%	旅行日数	日帰り	14	12%	56	17%		
	女	58	50%	167	51%		家族	家族	5	4%	71		22%	1泊2日	40	34%	65	20%	
年齢	10, 20代	4	3%	28	9%	グループ構成※	カップル	1	1%	12	4%	訪問目的※	2泊3日	31	27%	63	19%		
	30, 40代	17	15%	99	30%		友人	友人	34	29%	30		9%	3泊4日以上	13	11%	63	19%	
	50, 60代	57	49%	153	47%		同僚	同僚	13	11%	8		2%	観光	観光	69	59%	164	50%
	70代以上	38	33%	42	13%		ツアー	ツアー	46	40%	7		2%	研修、サークル	研修、サークル	13	11%	6	2%
住所	盛岡市内	18	16%	67	21%	その他	その他	3	3%	1	0.3%	仕事	仕事	5	4%	16	5%		
	盛岡市外	95	82%	253	78%	無回答	無回答	1	1%	1	0.3%	知人、友人	知人、友人	4	3%	26	8%		
グループ人数	1人	2	2%	89	27%	電車、新幹線	電車、新幹線	57	49%	168	52%	立ち寄った	立ち寄った	4	3%	24	7%		
	2人	13	11%	149	46%	マイカー	マイカー	13	11%	127	39%	イベント	イベント	3	3%	18	6%		
	3-5人	22	19%	73	22%	レンタカー	レンタカー	14	12%	16	5%	帰省	帰省	4	3%	17	5%		
	6-9人	22	19%	2	1%	タクシー	タクシー	20	17%	27	8%	親戚	親戚	0	0%	27	8%		
	10人以上	56	48%	10	3%	交通手段※	観光ツアーバス	32	28%	5	2%	その他	その他	10	9%	25	9%		
						でんでんむし	でんでんむし	21	18%	94	29%	無回答	無回答	1	1%	6	2%		
						その他	その他	17	15%	108	33%	ガイド	ガイド	105	91%	—	—		
						無回答	無回答	6	5%	3	1%	利用回数	2-3回目	8	7%	—	—		
						盛岡市への訪問回数	1回目	52	45%	88	27%	ガイドの	はい	—	—	52	16%		
							2-3回目	31	27%	59	18%	認識度	いいえ	—	—	272	84%		
							4-9回目	8	7%	34	10%								
							10回目以上	7	6%	74	23%								

注) ガイド型N=116, 非ガイド型N=325 (盛岡市への訪問回数, 旅行日数, 来訪目的はガイド型N=98, 非ガイド型N=258), ただし単数回答項目におけるカテゴリーの総数と有効回答の差は無回答を表す。
※を付した項目は複数回答



図1 盛岡城跡周辺の観光資源とガイドコース

ある。しかし、観光ガイドの有無によって生じる来訪者の観光体験の差異に着目する体系だった比較研究は少なく蓄積が必要である。以上から、都市における生活空間の観光への活用可能性の検討の視点に立ち、本研究では、①まち歩きをガイド型と非ガイド型に区分して両者を比較し、まち歩きに関する意識と体験の差異を把握すること、②まち歩きの際の地域の生活への眼差しに着目し、観光体験に生活の視点を取り込む方策を考察すること、の2点を目的とした。

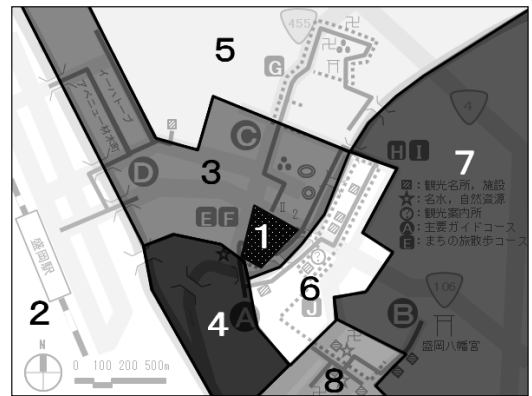


図2 回答者訪問地点エリア区分図

1. 研究の方法

1.1 研究対象地

研究対象地は、2015～19年度の観光推進計画の中で市の基本目標に「歩いて楽しむまち」を掲げ、まちなか観光の推進を重点施策とする岩手県盛岡市を取り上げた(盛岡市, 2015)。同市は、盛岡城築城後400年余りの歴史とまち並み、市内を流れる中津川、周囲を取り囲む山々があり、数多くの観光資源がある。しかし、観光拠点の広範囲への点在、分散は市の課題の一つである(盛岡市, 2015)。また、観光ボランティアガイド団体として「盛岡ふるさとガイドの会」があり、観光コンベンション協会主導のもと2001年に活動を開始した(盛岡ふるさとガイドの会, 2011)。現在、1～11期生の48名が在籍している。ガイドの申込みは1週間前までの予約制、料金はガイド1名につき3,000円(税込)であり、最大10名までである。主要ガイドコースは約2時間30分の行程となるA「啄木・賢治青春の道」、B「先人と町家の道」、C

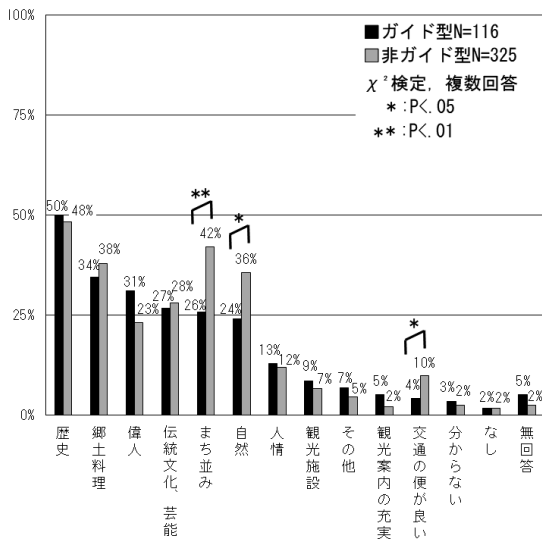


図3 訪問前に感じていた盛岡の魅力

「盛岡伝説と神秘の道」、D「啄木・賢治であいの道」の4コースのほか、距離が短く1時間で歩く「まちの旅散歩」コース(E, F, G, H, I, J)が6コースある(図1)。

1. 2 調査方法

まち歩き旅行者の意識を把握するため2016年6月21日(火)～12月23日(金)の期間、18歳以上の日本人を対象に二つの調査を実施した。一つ目は、盛岡ふるさとガイドに案内を申し込んだ旅行者(以後、ガイド型)を対象とし、ガイド終了後に調査票を手渡す郵送回収式アンケート調査である。二つ目は、ガイドが同行しないまち歩き旅行者(以後、非ガイド型)を対象とし、盛岡市中心市街地の主要観光施設である、プラザおでつて、もりおか町家物語館、大慈清水お休み処、もりおか歴史文化館の4ヶ所で、設置式郵送回収式アンケート調査と、来訪者に調査票を直接手渡す郵送回収式アンケート調査を組み合わせ、1日平均2.6時間実施した。

1. 3 調査票の構成

調査票にはまず、年齢、性別などの基本属性に関する設問、旅行特性を把握するための設問を設けた(表1)。また、ガイド型まち歩きの有効性、可能性の検証を企図し、ガイド型にはガイドの利用回数、参加したコース、再利用意向を、非ガイド型には盛岡ふるさとガイドの認知度、ガイドを利用しなかった理由を尋ねた。さらに、まち歩きに対する期待、意向、行動の把握を企図し、両型に共通して、訪問前に感じていた盛岡の魅力、まち歩き前の期待、まち歩き中の地元の人との会話の有無、生活・習慣・暮らしぶりに対する見学意向(4段階;非常

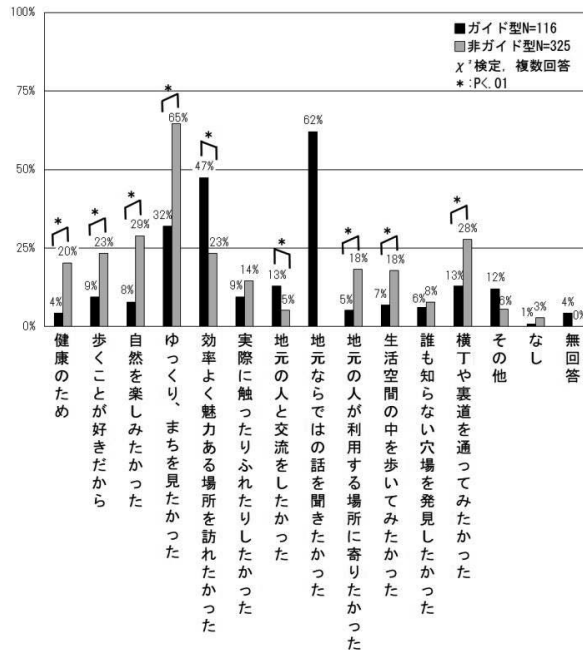


図4 まち歩き前の期待

に見たい～全く見たくない)、歩行の時間と距離をたずねた。その上で、既往研究(酒井ほか、2002;柳田ほか、2004)を参考に、歩いたルートの印象評価(10形容詞対、5段階評価;とてもある(-2点)～とてもある(2点))をたずね、ルート評価(10点満点)、再まち歩き意向(4段階;必ずしたい～絶対にしたくない)、歩行ルートを把握する質問項目を設けて調査票を構成した。

1. 4 分析方法

各設問に対する回答の単純集計(次章:2.1～9)に加え、まち歩き体験にある地域の生活への眼差しを、事前と事後、意識と行動の2つの視点から分析するため、事前のまち歩きへの期待、実際の歩行空間、まちのイメージ、歩行空間の印象評価、再まち歩き意向の相互の関係性(次章:2.5～7,9)を分析した。とくに、まちのイメージは、10の形容詞対の因子分析から構造を把握し、抽出された因子得点を用いて他の意識や行動との関係性を分析した。一方、歩行空間の分析にあたっては、旧中心市街地活性化基本計画区域図と都市計画図を参考に、研究対象地を8エリアに区分した(図2)。なお、近隣商業地域は生活空間の一部と捉え、エリア区分では商業地域と住宅地域、近隣商業地域との境界線を重視した。各エリアの特徴を概説すると、エリア1(エリアに含まれるガイドコース:A)は都市計画公園・緑地に指定されている「城跡」地域、エリア2(同:D)は「駅」地域、エリア3(同:C, D)は商店が立ち並ぶ「繁華街」地域、エ

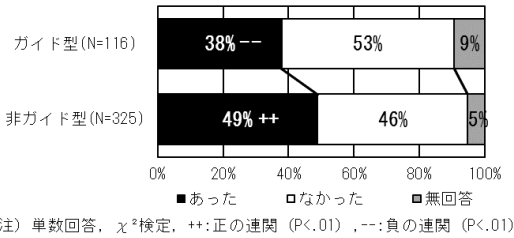


図5 地元の人との会話

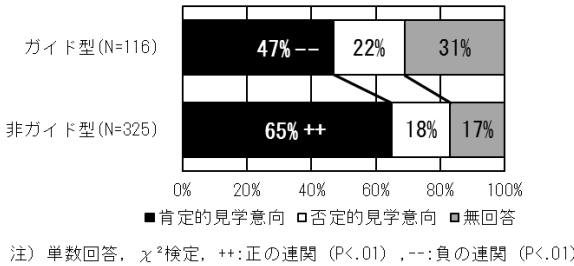


図6 生活、習慣、暮らしぶりへの見学意向

リア4は「住宅」地域、エリア5（同：C）は日本の道100選に選ばれた「寺町」地域、エリア6（同：A）は中津川が流れる「自然」地域、エリア7（同：B）は盛岡八幡宮が所在する「神社」地域、エリア8（同：B）は鉾屋町など伝統的な建物が並ぶ「町家」地域である。

2. 結果と考察

調査の結果、ガイド型旅行者では配布数471に対する有効回答率は24.6%、116人から有効回答を得た。一方、非ガイド型旅行者では、配布数1,011に対する有効回答率は32.1%、325人から有効回答を得た。

2.1 回答者の基本属性と旅行特性

回答者の基本属性(表1)をみると、性別はガイド型、非ガイド型でそれぞれ約半数、年齢は両者ともに50、60代が最も多く約半数を占めたが、ガイド型では70代以上(33%)、非ガイド型では30、40代(30%)が次いで多く、相対的にガイド型で年齢層が高かった。また、住所はともに盛岡市外が多く約8割だった。さらに、グループの人数と構成は、ガイド型で10人以上(48%)、ツアー(40%)が、非ガイド型で2人(46%)、夫婦(35%)が最も多く、旅行特性に違いがみられた。そのほか、交通手段はともに電車、新幹線が最も多くそれぞれ49%、52%だった。盛岡市の訪問回数は、ガイド型で1回目が45%を占めたのに対し、非ガイド型では10回目以上が23%を占め、ガイド型は初めての来訪者が多いことが示された。旅行日数と訪問目的はともに1泊2日、観光目的が最も多かった。

表2 歩行空間の印象評価の因子分析結果

ルート印象	平均得点	因子1	因子2	因子3
ごちゃごちゃした	-0.270	0.758	0.007	0.062
圧迫感のある	-0.710	0.741	-0.061	-0.086
複雑な	-0.040	0.669	0.109	-0.023
道が狭い	0.349	0.579	0.040	0.395
期待感のある	0.618	0.017	0.831	-0.063
奥行のある	0.604	-0.068	0.728	0.054
生活感のある	0.531	0.364	0.454	0.204
静かな	1.739	-0.140	-0.007	0.851
素朴な	0.647	0.110	0.371	0.525
閉鎖的な	-0.280	0.422	-0.347	0.493
寄与率		23%	17%	15%

注) 回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法
有効回答数N=275(ガイド型N=62、非ガイド型N=213)

2.2 ガイドの利用状況と利用意向

盛岡ふるさとガイドの利用回数は、初めてが大多数を占め91%だった(表1)。また、非ガイド型のガイドの認知度は16%と低く、利用しなかった理由では、自分のペースで歩きたかったが最も多く37%、次いで、思いつかなかった(33%)、自由に歩きたかった(30%)が多く、非ガイド型はまち歩きに自由度を求めていると考えられた。

2.3 盛岡の魅力とまち歩きへの期待

訪問前に感じていた盛岡の魅力(図3)は、ガイド型で歴史(50%)、郷土料理(34%)、偉人(31%)の順に多く、非ガイド型で歴史(48%)、まち並み(42%)、郷土料理(38%)の順に多く、上位の項目に差異がみられた。また、まち並み、自然、交通の便が良い、是非ガイド型で回答割合が高く、ガイドの有無という観光形態によって差異がみられた。一方、まち歩き前の期待(図4)は、ガイド型で、地元ならではの話を聞きたかった(62%)、効率よく魅力ある場所を訪れたかった(47%)の順に多く、非ガイド型で、ゆっくりまちを見たかった(65%)、自然を楽しみたかった(29%)の順に多かった。2つの型で比較すると、ガイド型では、効率よく魅力ある場所を訪れたかった、地元の人と交流をしたかった、の期待が多かったのに対し、非ガイド型では、歩くことが好きだから、健康のため、ゆっくりまちを見たかった、自然を楽しみたかった、地元の人が利用する場所に寄りたかった、生活空間の中を歩いてみたかった、穴場を発見したかった、横丁や裏道を通ってみたかった、の期待が多かった。回答数の多さも考慮すると、ガイド型で効率性が、非ガイド型ではゆっくり見て歩くという時間消費性が求められていると考えられた。

2.4 地域との交流機会と生活空間への見学意向

まち歩き中にガイド以外の地元の人と話す機会(図5)があったと回答した人は、ガイド型で38%だったのに対し、非ガイド型では49%で多かった。盛岡の生活、習慣、

表3 エリアごとの印象評価

印象	歩行	エリア1	2	3	4	5	6	7	8
複雑性	あり	-0.121	—	-0.090**	—	—	—	0.263	0.515
	なし	0.230**	—	0.360**	—	—	—	-0.067*	0.166**
期待演出性	あり	-0.118	—	-0.080	—	—	—	—	—
	なし	0.220**	—	0.330**	—	—	—	—	—
静穏性	あり	—	—	—	0.534	—	—	—	0.406**
	なし	—	—	—	-0.020**	—	—	—	-0.131**

注) t 検定, 歩行あり (N=180), 歩行なし (95), *, *: P<.05, **: P<.01

表4 歩行空間の印象評価がルート平均評価得点, 再まち歩き意向に及ぼす影響 (重回帰分析結果)

従属変数	決定係数	独立変数		
		因子1 複雑性	因子2 期待演出性	因子3 静穏性
ルート平均評価得点	0.198		0.426**	-0.123*
再まち歩き意向	0.056		0.231**	

注) 有効回答数274, *: P<.05, **: P<.01

暮らしぶりに対する見学意向(図6)は, ガイド型(47%)よりも非ガイド型(65%)で肯定的意向が多かった。

2.5 まち歩き前の期待と実際の歩行空間の関係性

実際に歩いた空間は, ガイド型ではAコースが最も多く33%, 次いで, まちの旅散歩コースが26%, Bコースが18%の順で多かった。平均歩行時間は, ガイド型で2.1時間(ガイドを伴う歩行), 非ガイド型で2.9時間となり, 非ガイド型が長かった (P<.01, t 検定)。また, 歩行距離はガイド型で1.7km(同), 非ガイド型で4.6kmとなり, こちらも非ガイド型が長かった (P<.01, t 検定)。

まち歩き前の期待と歩行空間の関係性を把握するため, 2つの質問項目間でクロス集計と χ^2 検定を行った結果, ガイド型では, 生活空間の中を歩く期待を持つ回答者において7(神社), 8(町家)を歩いた人が多かった (P<.05)。非ガイド型では, 健康のために歩く期待を持つ回答者において4(住宅)を歩いた人が多かった (P<.05)。また, 横丁や裏道を歩く期待を持つ回答者において7(神社), 8(町家)を歩いた人が多かった (P<.01)。さらに, 生活空間の中を歩く期待を持つ回答者, 地元の人との交流の期待を持つ回答者, 穴場を知りたいという期待を持つ回答者は8(町家)を多く歩いていた (P<.05)。そのほか, 効率よく魅力ある場所を訪れたかった回答者では5(寺町)と7(神社)のエリアを歩いた人が多かった (P<.05)。

2.6 歩行空間とまちのイメージの関係性

歩いたまちのイメージについて10の形容詞対によって評価を求めた結果, 「静かな」の平均得点が1.739点で最も高く, 次いで「素朴な」が0.647点で高かった。次に, そのイメージ構造を把握するため10項目の因子分析を行った(表2)。その結果, 3つの因子が抽出され, 因子

表5 ガイドの再利用意向

属性	カテゴリー	人	割合
ガイドの再利用意向	必ずしたい	13	11%
	機会があればしたい	95	82%
	あまりしたくない	4	4%
	絶対にしたくない	0	0%
	無回答	4	3%

注) 単一回答, ガイドの利用回数N=116, ガイドの認知度はN=325

表6 エリアごとのルート平均評価得点と再まち歩き意向

	歩行	N	ガイド型 エリア4	非ガイド型 エリア5
ルート平均評価得点	あり	4		7.89
	なし	109		7.13*
再まち歩き意向	あり	37	3.50	
	なし	209	3.06*	

注) t 検定, *: P<.01

の累積寄与率は55%となった。第1因子は「ごちゃごちゃした」「圧迫感のある」の因子負荷量が大きく【複雑性】を表す因子と解釈された。また, 第2因子は, 「期待感のある」「奥行きのある」の因子負荷量が大きく【期待演出性】, 第3因子は「静かな」「素朴な」の因子負荷量が大きく【静穏性】を表す因子と解釈された。さらに, 実際に歩いた空間とイメージの関係性を把握するため, 対象エリアの歩行の有無により回答者を2群に分け, 3つの因子得点の差を解析した結果(表3), エリア4(住宅)を歩いた回答者群で【静穏性】, エリア7(神社)を歩いた回答者群で【複雑性】, エリア8「町家」を歩いた回答者群で【複雑性】【静穏性】の因子得点が高かった (P<.01, t 検定)。反対に, エリア1(城跡), 3(繁華街)では【複雑性】【期待演出性】が低かった (P<.01, t 検定)。

2.7 まちのイメージとルート評価, 再まち歩き意向

歩いたルートの評価を10点満点でたずねた結果, 平均評価得点はガイド型で7.81点, 非ガイド型で7.13点となり, ガイド型が非ガイド型よりも高かった (P<.01, t 検定)。また, 再まち歩き意向を4~1点に得点化し, 平均得点を比較した結果, ガイド型は3.07点, 非ガイド型は3.23点となり, 非ガイド型がガイド型より高かった (P<.01, t 検定)。さらに, まちのイメージ評価とルート評価, 再まち歩き意向の関係性を明らかにするため, 3因子の因子得点を独立変数, ルート評価, 再まち歩き意向を従属変数とする重回帰分析を行った(表4)。その結果, 【期待演出性】がルート評価と再まち歩き意向に正の偏相関係数を持ち, 【静穏性】がルート評価に負の偏相関係数を持っていた (P<.05)。

2.8 ガイドの再利用意向

また, ガイド型のガイドの再利用意向(表5)は, 必

ず利用したい (11%), 機会があれば利用したい (82%) を合わせると 93%と大半を占めた。しかし、中でも、機会があれば利用したい、の回答数が多かったことから、肯定的ではあるものの積極的ではないと考えられた。

2. 9 歩行空間とルート評価、再まち歩き意向

歩行空間とルート評価、再まち歩き意向の関係性を把握するため t 検定を行った結果、ガイド型では、エリア 4 (住宅) を歩いた回答者で再まち歩き意向が高かった (表 6)。また、非ガイド型では、エリア 5 (寺町) を歩いた回答者でルート評価が高かった ($P < .01$)。

3. 総合考察

ガイド型と非ガイド型のまち歩きの比較から、ガイド型は効率性を、非ガイド型は自由度や時間消費性を求めている、まち歩きそのものに対する志向が異なっていた。つまり、ガイドを伴うまち歩き体験は、高い年齢層、10人以上のグループ、初めての来訪者によって支持され、効率よく“まち”を紹介してほしいという期待をみてとることができた。また、相対的にであるが、非ガイド型は生活空間や裏通りへの関心が高く、盛岡の生活、習慣、暮らしぶりへの眼差しを持ちつつ、地元の人と会話していた。それゆえ、観光体験に生活の視点を取り込む上では、生活空間への眼差しを持つ非ガイド型の来訪者の実際の歩行空間の活用を検討できる。その観点から盛岡を例にとると、エリア 8 (町家) を歩いた来訪者では、ガイド同行の有無を問わず、生活空間を歩きたいという期待が持たれており、こうした複雑性や静穏性を持つ“まち”に可能性を見出せる。また、観光拠点が点在、分散する盛岡市の観光ルートには、拠点間の距離が長い区間が少なくないと考えられ、そうした区間において生活への眼差しに応える歩行ルートづくりが可能である。

最後に本研究の課題に触れておく。ガイド型は非ガイド型よりもルート評価点が高く、有料ガイドへの参加による肯定的評価バイアスなど他の要因の検討も必要である。また、本研究が採用した調査方法には歩行ルートの詳細把握に限界があった。今後の課題としたい。

謝 辞

本研究は、盛岡ふるさとガイドの会をはじめ、盛岡市の観光に関わる皆様にご理解とご協力をいただいた。ここに記して感謝を申し上げる。

補 注

¹⁾ (公社) 日本観光振興協会 (2017.5.25 更新) 観光ボランティアガイドとは。日本観光振興協会ホームページ <http://www.nihon-kankou.or.jp/>, 2017.5.26 参照

引用文献

- 茶谷幸治 (2012) 「まち歩き」をしかけるコミュニティ・ツーリズムの手ほどき。学芸出版社、京都、188pp.
- 深見聡 (2009) 観光ボランティアガイドの台頭とその意義—『篤姫』プログラムを事例として—。地域総合研究, 37 (1), 45~56.
- フंक=カロリン (2008) 「学ぶ観光」と地域における知識創造。地理科学, 63 (3), 160~173.
- 徐華・松下聡・西出和彦 (2001) 認知空間の特性—回遊空間における経路選択並びに空間認知に関するシミュレーション実験的研究 (その 2)。日本建築学会計画系論文集, 66 (545), 173~179.
- 今井成男・飯島祥二・捧富雄・野本晃史 (2003) 中国・四国地方における観光について。岡山商大社会総合研究所報 24, 43~88.
- 今井亮輔・中井検裕・中西正彦 (2004) 観光ボランティアガイドによる観光ルートの設定に関する研究—横浜シティガイド協会を対象として—。都市計画論文集, 39 (3), 223~228.
- 磯野巧 (2016) 徳島県徳島市における観光ボランティアガイド活動の地域的展開。観光研究, 27 (2), 59~70.
- 加藤麻里子・下村彰男・小野良平・熊谷洋一 (2003) 地域住民による観光ボランティアガイド活動の実態と動向に関する研究。ランドスケープ研究, 66 (5), 799~802.
- 木下瑞夫・田維隆昌・牧村和彦・浅野光行 (1999) 都心地区における歩行者行動調査とその有用性に関する研究。土木学会論文集, 625 (44), 161~170.
- 林藤綱・東秀紀・岡村祐 (2012) 横浜市観光ボランティアガイド組織に関する研究—その育成方式を中心として—。観光科学研 5, 95~106.
- 松並宏直・柴田祐・澤木昌典 (2013) 関西地方の小都市における観光ガイド組織によるガイド型まち歩き観光の特徴と効果。日本都市計画学会, 都市計画報告集, No. 11, 160~163.
- 盛岡ふるさとガイドの会 (2011) 盛岡ふるさとガイドの会十年のあゆみ。盛岡ふるさとガイドの会, 16pp.
- 盛岡市 (2007) 盛岡市中心市街地活性化基本計画。盛岡市, 48pp.
- 盛岡市 (2015) 盛岡市観光推進計画。盛岡市, 19pp.
- 直井岳人・十代田朗・飯島祥二 (2013) 観光地としての歴史的町並みにおける地元の生活の様相。都市計画論文集, 48 (1), 82~87.
- 西井和夫・土井勉・川崎雅史・西野至・服部純司 (2000) 洛西・洛東エリアにおける観光スポットイメージと回遊行動特性に関する分布。土木計画学研究論文集 17, 515~523.
- 西村幸夫 (編著) (2003) 観光まちづくりとは何か観光まちづくり、まち自慢から始まる地域マネジメント。学芸出版社、京都、285pp.
- 酒井裕一・藤居良夫 (2002) 街路景観評価に対する分析手法の考察。ランドスケープ研究, 65 (5), 833~836.
- 柳田健太・小野良平・伊藤弘・下村彰男 (2004) 都市近郊鉄道における車窓からの景観の特性に関する研究。ランドスケープ研究, 67 (5), 643~646.

(2017年6月1日受付, 2018年2月9日受理)